



第7412号

2021年12月20日(月)

岸田首相の話し方に思う

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆所信表明に安定感

先日、第2次岸田政権発足後初めての岸田文雄首相の所信表明演説を聞いて、周到に準備されているのは当然だとしても、話し方に安定感があったと感じた。

文章を声で表現するときの音の高低、すなわち、イントネーション(抑揚)が、話し始めから文末にかけて、高い音から低い音へとなだらかな弧を描いていくのが、最も座りが良く、聞き手の安心感が得られる抑揚である。

岸田首相の話し方に安定感があるのは、この抑揚が整っていることが大きい。一文は長くても40文字以内に収まっており、話す速度にも無理がない。

「～が」「～でありまして～」のように助詞や語尾を伸ばすと、声のソフトさと相まって歯切れの悪さが目立つ傾向があるが、所信表明演説においては、時折、助詞を強調する力みが入ることを除けば、約34分間、目立った言いよどみや語尾伸ばしがなく、マスクをつけたままにもかかわらず、滑舌も良かった。

◆定石踏んだ演説

惜しいのは、マスクをして、手元にある分厚い原稿を見ているため、ほとんど表情が印象に残らなかったことだ。ただし、演説の中で同意を求める呼び掛けのフレーズ「～ではありませんか」が何カ所か出てきたが、このときは、必ず力強く声を張り、顔を上げていた。そして、拍手。拍手を促すお約束フレーズだったのだろう。メリハリが付き、演説を引き締める効果があった。

内容で印象的だったのは、「遠きに行くには、必ず近きよりす」(「礼記」中庸)、「屋根を修理するなら、日が照っているうちに限る」(ジョン・F・ケネディ)など、格言を入れていたところだ。適切な引用によって、イメージが明確になるだけでなく、原典の持つ力も働いて説得力が増す。元外相だけあって、スピーチ慣れしていることを感じさせる。

また、「日本ならできる、いや、日本だからできる」「新しい資本主義の主役は地方です」「人への分配はコストではなく、未来への投資です」などの簡潔で分かりやすいフレーズは、直感的なワンフレーズが国民に支持された小泉純一郎元首相を思い出させた。

「国の礎は人です」と、語り始めた最後の段落では、愛媛県松山市の高校訪問時にタブレットを使った授業を体験し、戸惑う自分に隣の生徒が操作を教えてくれたというエピソードを披露。話し手の経験や感情を語ることは、共感を得るスピーチには欠かせない要素である。自身の人間味を感じさせるとともに、若い世代の姿を見せて「共に世界に誇れる日本の未来を切り拓(ひら)いていこうではありませんか」と締めくくり、最後まで定石を踏んだ聞きやすい演説だった。

◆コメントは素っ気ない

ただ、記者会見は苦手なのか、慎重に言葉を選んでいる様子は伝わるが、話し方も表情も素っ気なく感じる。世相を表す今年の漢字に「金」が選ばれたことについて、首相は「東京五輪・パラリンピックで日本中が盛り上がった。なるほどなと思った」とコメントしていた。コロナ禍で「お金」に絡むあれこれに振り回された国民感情の表れかもしれない、とは少しも思わなかったのだろうか…。

多くの国民は首相の発言をニュースでしか聞けないのだから、こういう時のワンフレーズこそ共感できる言葉を意識してもらいたい。首相自身の今年の漢字は、新しい資本主義を「切り拓く」の「拓」だとか。コロナ禍で荒れた地を開拓し、平和に均(なら)す「拓」であってほしいと思う。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003